痕跡

鳥之巣軍師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
痕跡

【Ｎコード】
Ｎ８０１７Ｐ

【作者名】
鳥之巣軍師

【あらすじ】
世界的指名手配犯のハッカーであるＬｏｃａｌ★ＳＴＡＲに、サーバへの侵入を阻まれたハッカーが復讐しようとするが、Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲの前に惨敗してしまう。
世界的ハッカーのＬｏｃａｌ★ＳＴＡＲは、実は高校生だった。
物語は、一体どんな展開を描くのか。
それは作者でも知りません（笑）

Ｌｏｃａｌ☆ＳＴＡＲ（前書き）

ここでは、クラッカーやクラッキングを、知名度の問題からハッカーやハッキングに置き換えています。
また、この小説で出てくるかも知れない技術を使って、他人のサーバを攻撃すると、不正アクセス禁止法にて裁かれる可能性もありますので、ご注意ください。

Local☆STAR

流れるようなしなやかさでキーボード入力をしている人影が窓に映る。
カタカタとなる音が心地よいリズムを刻み、いつしか時計の針の音と同調している。
その人が手を止めた。
「終わった。」
呟いたその言葉を、部屋に飾られたアニメキャラクターのポスター以外、誰が聞いただろうか。

朝7時。
冬の朝は寒い。寒いけれども、学校を休む訳にはいかない。
―そんな思考を働かせているのは、現役高校生の小林誠（こばやしまこと）

学校までの道のりは、15分程度なのでもっと遅い登校でも良い筈なのに、速く行くのには理由がある。
”好きな人”を見たいのだ。
同じような時間で学校に到着する、陸上部の同学年。
1年の時に、同じクラスで一目惚れしたのである。
とは言っても、2年生で既に別クラス。

「相手がこんな奴に告白されたら迷惑だろ」と言う理由を勝手に付けて、告白をしようとしなかったのである。ただ、遠くから見ていたいと思っているからこそ、同じ時間に着いても、会話する訳でもなく通り過ぎるのである。

この学校は、いわゆる不良学校である。とは言っても、小林誠は不良ではない。
ただ、成績不振なだけである。教室では、陰キャラと言う立場を築いている。
「おい。お前、何年？」
ちなみに、この学校では、色で学年が分けられている。
話しかけてきたのは、１年生だろう。
「自分から名乗れよ。」と言ってみた。
「高橋弘樹（たかはしこうき）。」
相手が素直に返してきた。
「何年？」
知ってても聞くのが礼儀だと・・・。
「１年普通科６組。」
この学校、機械科もあるが、建物の場所が違う。そのため、この建物の階段で会うのは、普通科である。
「俺は、２フ４。」
自分のクラスを教えてみた。

と、何故か走って逃げようとしている。
止める気はなかったけれど、何故か相手の手を掴んで逃げないようにしていた。
少しだけ武術をしていて良かったと思える瞬間だったかもしれない。
「ごめんなさい、知らなくて・・・」
語尾は小さくて聞こえなかった。登下校用の靴だと学年が分からないから仕方がないと思う反面、小さな怒りがあった。
「ブログとかやってる？」
聞いてみた。
「はい。パソコンでやってますけど。それが何か？」
態度が変わった気がするが、学年が上だと分かったんだから、敬語を頑張って使おうとしている。不良学校だから不良の１人だと思っ

ているのかもしれない。
それはそれで楽しそうだから良いのだけど。
「サイト教えてくれる？俺もブログやっててさ。」

なんとか承諾させた。
承諾させたとはいえ、俺はそのサイトでブログをやっていない。
ＵＲＬを聞き出したに過ぎないが、午後になるまで使う気はない。

夜８時。
帰宅した。

部屋に入ると同時に、パソコンを起動する。
パソコンが熱暴走しては困るけれど、自分が寒いので暖房をつける。
暖房は１時間で切れるように設定してある。
パソコンがフル稼働している中で、暖房をつけていたら暑くなりすぎて困った経験からである。それも仕方ないと言えば、それまでである。
この部屋。壁に、とあるアニメキャラクターのポスターが貼ってあり、クローゼットがあり、机があり、ベッドがある。
そして、パソコン５台がフル稼働している。
その中の１台が残りの４台と繋がっている。
パソコンの演算能力を高める目的である。
何のために、そんな事が必要なのか。

それは、攻撃の為である。

朝、高橋が教えたＵＲＬをブラウザで確認してみる。
確かに、ブログをやっていた。

「よし。」
掛け声と共に、ヘッドフォンをつけて軽く指を動かす。
デスクトップにある「ｓｅｒｖｅｒ．ｔｘｔ」を開いて、ＵＲＬ欄の＊＊＊．ｊｐと書かれた文字があるかを探す。見つからない。
ブログを提供しているサーバに侵入出来るかを問い掛ける。
サーバからの応答が返ってくる。
「チャンスか。」
まだ、アップデートしていないようだ。
確か昨日、アップデートプログラムが配布された筈だから、まだ管理者が気付いていない。
これなら、脆弱性が攻撃出来る。
「侵入成功っと。」
あっという間に、侵入し高橋のブログデータを探す。
簡単だった。「ｔａｋａ@ｂｌｏ」と書かれたフォルダにブログデータが入っていた。
その中で、トップページに表示される物を探す。
これも簡単だ。「ｔｏｐ」のファイルがあった。
それを編集する。
「朝方、2普4と答えた人です。次に会ったら、気をつけてね。Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲ」
ファイルを編集したら、それを上書き保存。
保存したちょうどその時に、高橋がログインした。
きっと驚いているに違いない。
「あとはログを消してっと。」
サーバでは通常、ログを取っている。誰がいつログインしたのか等。

操作履歴まである筈だから、見られれば侵入した事がばれてしまう。
踏み台を使っていてもやはりそこは慎重にやるべき所である。
まず、バックドアを仕掛けた。
次に、ログを消す。
あとは、高橋のパソコンにリモートコントロール用のプログラムを送信しておいた。
高橋がそれを起動すると、自動的にバックドアが作られて踏み台に組み込まれる仕組みである。

「終わった。」
呟いたその声は自信に満ちていた。
彼は、ハッカーである。
それも、世界的に有名で、Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲのファイルを見つけたらハードディスクをＭＢＲ（マスターブートレコード：起動に関係する隠し領域的な存在。通常、意識する必要はない。）までも、消去しないといけないと言われる程である。
リカバリーが対策にならないから、米国防総省のオレンジブックを使えとまで言われている。

彼は、国際的指名手配犯であり、捕まれば2度と戻って来られないと言われている伝説のハッカー、Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲである。

Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲ

小林がハッキングを始めたのは、いつ頃だっただろうか。
幼い頃から、親が家にいない間、パソコンを操作して時間を潰していた。

小学生も４年生になるぐらいには、自分のノートパソコンを持っていた。
今でも使っている、愛用のパソコンだ。黒い光沢が今でも残っている。

中学生になった時には、家にあるパソコンの情報は全て偽装データになっていたし、ノートパソコンは、無線スポットのただ乗りをしていた。

そして、今、高校２年生になって、Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲと言う国際的指名手配犯になっている。
しかも、誰も日本の高校生がＬｏｃａｌ★ＳＴＡＲだと気付かない。

そういえば、どうしてＬｏｃａｌ★ＳＴＡＲなんてハンドルネームを付けたのだろう。
「Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲか。もう変えられないな・・・。」
呟いたその言葉に、一体何が隠されているのだろうか。

―高橋はその頃。

トップページに貼られた、ハンドルネームＬｏｃａｌ★ＳＴＡＲによる攻撃。

しかも、今朝、声を掛けた人がニュースに取り上げられる程の国際的指名手配犯だったと言うのは、怖い事だ。

そういえば、未だに捕まらない上に、国籍不明だった筈だ。

「通報してやろうかな。」

ふっと笑みを浮かべて、携帯電話を手に取る。

「・・・Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲを見つけました。」

警察に掛けられたその電話を、Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲが聞いている事を知らなかった。

「昨日、通報したよね？」

昨日の、高橋とか言う1年生が目の前にいる。

警察に連絡されてしまっては困るので、携帯電話にも侵入していた事が良かった。

警察には、昨日の高橋からの通報記録は存在しない。

警察に電話を掛けると、途中で俺の部屋にある電話に転送される。

そして、俺が警察のフリをして会話していたという訳だ。もちろん、途中で音声エフェクタを使った。

「してませんよ。通報って、何を通報するんですか？」

知らないふりをしても、遅い。既に、こちらは証拠を持っている。

「じゃぁ、これは？」

音声録音機。ちょっと古いが、テープ式レコーダーである。

「あの、Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲを見つけました。俺のパソコンが侵入されました。・・・」

高橋が少し、動揺している。

「警察署や交番に駆け込もうなんて思っちゃ駄目だよ。君のパソコンの中にある隠しフォルダ・・・」
「分かりました。警察には行きませんし連絡もしません。」
高橋が必死に俺が喋るのを止めている。

ここは、1年生の教室の前である。と言うより、高橋のクラスの前であると言うのが正しい。つまり、俺が言おうとしていることを、クラスメイトに聞かれると大変だと言う訳である。

俺が言おうとしたのは、踏み台に自動設定した時に、デスクトップに隠しフォルダがあるのを見つけ、中を見て驚いた。と言うことである。
その中身は、なんと同じクラスの女子を隠し撮りしたものだった。全ての画像が、同じ女子の物だったので、相当好きなのであろう。けれど、隠し撮りをすると言うことは、何かあるのかもしれない。そのあたりは、関係がないから知らないと割り切ったが。

「先輩も、画像のこと言わないでくださいね。」
「俺は、画像なんて一言も言ってないがな。」
高橋はさらに、挙動不審になった。
面白いが、チャイムがなるので教室に戻る。
高橋は、挙動不審すぎるので、放置することにした。

放課後。
部活に行く。部活と言っても、コンピュータ部に所属しているから、運動系ではない。
とは言っても、学校のコンピュータ室のコンピュータ全ても、踏み台だから、部活で操作した内容も、操作履歴として送信されている。
また、家でも学校のパソコンを操作出来るため、便利ではある。

カタカタカタカタカタとキーボードを叩く音しか聞こえない。
部員数は、１０名と少ない部活である。
男子５名、女子５名。何故かちょうど半分居る。学年別に分けると、
３年４名、２年１名、１年、５名である。

２年は俺１人と言うことになる。
可哀想に、次期部長が確定しているのである。
なんと不運な。

「今日の活動は、プログラミングをする事。」
３年の先輩が、活動内容を言っている。
プログラミングなんて、家で毎日してるから飽きている。やる気が起きない・・・。

「小林。早く、プログラミングやれ。」
「すいません。ってか、言語は何を使うんですか？」
「Ｃだよ、Ｃ。話、聞いてたのか？」
「すいません。」
結局、Ｃ言語を使うなんて。
課題のプログラムは、『最終目標：ゲーム制作をする事。』
どんなゲームでも良いらしい。

もう作ってしまおうかな。今は、基本構文をやっている所で、ほとんどＩＦ文までしか進んでいない。一学期だから、１年生に教えながらだと進みが遅いのが泣きたい所だ。

仕方がないから、与えられたパソコンで、プログラミングを始める。
部活が終わる前に、３Ｄゲームが出来た。
「先輩、最終目標終わりました。」

先輩の目が、変わった。
「プログラミング出来るなら最初から言えば良いのに。」
呟いたその声は、俺の耳に入って脳に伝えられた。
「良いじゃないですか。言いたくないことも、あるんです。」

家に帰って来たのに、家には誰もいない。
時間は既に、八時を過ぎているのに。

いつも俺は、1人なんだ。親にも見放されて1人で生きてくのか。
涙は過去に枯れて、もう流れない。

キーボードを叩き始める。カタカタカタカタカタカタカタ・・・。
キーボードの音が、心を静める。

壁に貼った、アニメキャラクターの優しい笑顔が俺を元気づける。
壁に貼ってあるアニメキャラクターは、俺の嫁である。
頭の上に、花飾りを付けてのほほんとした性格なのに、最強のハッカーと言う設定である。
彼女の周囲は、個性的な友人達が居てとても楽しそうなのである。
俺に対して笑っているのだ。そう決めつける。俺だけが独占する笑顔。

パソコンがパッとダイアログを表示した。
「侵入成功。」っと。

Ｌｏｃａｌ☆ＳＴＡＲ

キーボードを叩く音が、部屋に響く。

放課後の部室。俺は課題が終わってしまい、することがないので遊んで良いと言うことになった。実際は、後輩へ指導しなくてはならないのだが、遊ぶ方が大切である。

「えっと、チャットでもしとくかな。」

独り言は誰も聞いてなかったようである。

「よし。ここだ。」

声には出さず、内心で呟く。

チャットは楽しい。

リアルタイムで会話をしている電話のような錯覚を起こせるからである。

ただ、声ではなく文を使う違いがあるだけで、あとはそんなに変わらない。

数人で冗談交じりの会話を楽しんでいるときに、そいつが来た。

「Ｃｌａｃか。こんっと。」

普通に挨拶し、会話を続ける。

入室したばかりの、Ｃｌａｃは会話の内容が分からないのか何も発言しない。

数分後、パソコンの話題になった。

やはり、チャットをしているとパソコンを使うので、欠かせない話題と言っても過言ではない。

すると、数分前に入室して挨拶したきり発言数が無かったＣｌａｃが発言してきた。

「俺、ここのチャット用サーバをエンターキーを押すだけで落とせ

るよ。」
これは、国際的指名手配犯としては聞き逃し出来ない内容である。
エンターキーを押すだけと言うことは、今までプログラムを作っていたと言うことか。
あとは、実行させるだけだから、エンターキーを押せば良いと言うのは分かる。
サーバに多量の負荷を掛けるであろう事も安易に予想できた。

これは、Ｄｏｓ攻撃か。それとも踏み台を利用したＤＤｏＳ攻撃か。
「それって、犯罪なんじゃないか？」
一応、発言してみた。
「そんなこと、分かってる。既に数台のサーバを踏み台にしてるし。」
何故か聞いてないことも教えてくれた。
踏み台を利用したＤＤｏＳ攻撃であることは分かった。
「ってか、発言するのにエンターキー押してるんじゃね？」
と言う、別の人の発言で考える時間が出来た。
「言葉のあやだよ。つまり、簡単に乗っ取れるって事。」
何故か、Ｃｌａｃは話が飛躍している。先ほどまでの内容だと、ＤＤｏＳ攻撃をするかのような内容だった。所が、次は、乗っ取れるとまで書いている。
まさか、バッファオーバーフロー攻撃か。

「させる訳ないだろ。」
フッと唇に微笑を携えた俺は、既にここが部室である事を忘れていた。

「やってみせてよ。証拠も欲しいな」っと犯罪をそそのかす内容を発言し、自分の持ち運び用ノートパソコンを起動する。

「分かった」とＣｌａｃが発言したのを確認し、チャットルームのホストを調べる。
自分が以前に侵入しているかどうかの検索を同時進行で進める。
「じゃぁ、始めるぜ。五分後にアクセスして来いよ。」と言う発言を最後に、チャットが多量の負荷でアクセスエラーに切り替わる。

「あった。」
自分が以前に侵入したサーバ一覧に、チャットのホストがあった。
踏み台ナンバーを調べる。すぐに見つかる。
踏み台ナンバー　５０３０１番

踏み台を多数起動させた上で、５０３０１番のチャットサーバに侵入する。
そして、特製のプログラムを置くこと５０秒。
Ｃｌａｃが網に掛かった。
「捕まえた。どうしようか。」
キーボードを素早く入力し、画面に映る文字を見ながら頭で次のコマンドを導き出す。

「Ｍｙ　ｈａｎｄｌｅ　ｎａｍｅ　ｉｓ　Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲ．」とファイルを送信してみた。

数秒後、相手からの接続が切断されたのを確認して、巧妙にログを消しながら、こちらも切断した。

５分立ってから、チャットルームに再度行ってみた。
「すいません。出来ませんでした。」
Ｃｌａｃがそんな発言をしていた。
「だけど、Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲって奴に阻まれた恨みは、あとで倍にして返します。」

こんな発言もあった。

ここまでやって、ここが部室であることに気付いた俺は、周囲が気付いていないのを確認してから、用事があると言って早めに帰った。

その時、ノートパソコンを抱えた教員1人とすれ違った。
その教員は、機械科担当だから、俺は詳しくは知らない。ただ、廊下ですれ違っただけである。

その教員こそが、Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲにチャットサーバへの侵入を阻まれたＣｌａｃである事を一体誰が知っていただろうか。

Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲ

とあるチャットルームで、Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲに侵入を阻まれたＣｌａｃ事、学校教員の佐藤大介は、悩んでいた。
Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲをどこかで聞いたことがあると調べて見ると、世界的に有名なハッカーであることが判明した。けれど、何故侵入することがばれたのか。
その結論が出せずに居た。

「侵入失敗　－原因－　ポートが開いてないよ。ｎｍａｐ　－ｐ－ｈｏｓｔを試してみよう。」
ダイアログが促す。
「先輩、これ難しいですよ。」
「そうか？ｅａｓｙｍｏｄｅなんだが。」
ここは、とある高校のコンピュータ室である。
時刻は既に、夕方。一体、何をしているかと言えば、放課後の部活である。
後輩に、新しく作ったハッキングゲームをやらせてみた結果がＥＡＳＹ（簡単）モードで難しいと言われる結果になってしまった。

実を言うと、本当の攻撃方法をゲーム化しただけである。
ターミナル（コンソールとも言う。）で、コマンド入力を行い、ターゲットサーバに侵入していく。もちろん、バックドアを仕掛ける事も出来るし踏み台も使える。
その為に、実物と同じ動作をするパスワードクラックツールや、ポートスキャンツール、脆弱性を攻撃するツール等を作った。それを学校に持ってきて後輩にやらせてみたのである。

「先輩、そんなに簡単だって言うなら、やってみてくださいよ。作

った本人なら出来るんでしょ？」
もちろん、後輩には、ハッキングゲームだとしか言っていない為、本当のハッキングと同じ動作をしている事を知っているとは思えない。

「分かった。やってやるよ。モードは、ｄｉｆｆｉｃｕｌｔ（難しい）ｍｏｄｅで。」
「え、ｅａｓｙはやらないんですか？」
「簡単すぎるからな。」

画面にＳＴＡＲＴの文字が出る。
ターミナルを起動し、ｎｍａｐ　－Ｆ　ｈｏｓｔでポートが開いているかを調査する。
結果、
２２／ｔｃｐ　ｏｐｅｎ　ｓｓｈ（ｓｓｈは接続方式の１つ。）
１９９／ｔｃｐ　ｏｐｅｎ　ｓｍｕｘ
５５５５５／ｔｃｐ　ｏｐｅｎ　ｕｎｋｏｗｎ
と結果が出た。
ｓｍｕｘが開いている時は、ｓｎｍｐｗａｌｋ　ｈｏｓｔ　－ｖ１　－ｃ　ｐｕｂｌｉｃ．　－　ｍｏｒｅで機器情報等の調査。
ＨＪＵＳＥＲにユーザー名を発見。
同時進行で、ｕｎｋｏｗｎの５５５５５番ポートを調べる。
ｔｅｌｎｅｔ　ｈｏｓｔ　５５５５５でｓｓｈであることを確認。
ｓｓｈのリモートパスワードクラック（オンラインパスワードクラック）を行い、パスワードを取得。
ｓｓｈ　ｕｓｅｒ@ｈｏｓｔ　－ｐ　５５５５５で接続要求。パスワードを訊ねられるので、パスワードを入力。
一般ユーザー権限を奪取したので、ｒｏｏｔ（管理者権限）を奪取するために、脆弱性を調べると、認証を回避出来る脆弱性を確認。
そこを攻撃したら、ｒｏｏｔ権限が奪取できるので、バックドアを

設置して完了。

ダイアログが、ハッキングに掛かった総時間と能力があるかないかを判定している。
ダイアログの中で、動いていた数値が全て止まって、評価が出された。
総時間：６０分／１２０分
能力値：１００／１００
総合評価：グル（ハッカー階級の最上級クラス。神的存在を突破した階級。）クラス

「先輩、凄いですね！」
「まぁ、開発者だし。」
これぐらいのゲームで負けていては、ハッカーとして国際的指名手配犯として駄目だと思う。だが、後輩達は、必死になってやっても、ｅａｓｙｍｏｄｅがクリア出来ない。
「侵入失敗　－アラート－　相手のサーバで侵入検知に引っ掛かったよ。ログを消してないから、逮捕確定。」と出るぐらいｅａｓｙｍｏｄｅに引っ掛かる奴もいた。

実際、やったことが無い人に取っては難しいだろう。ただ、近年のスクリプトキディ（厨房：出来ると思い込んで、ハッキングしようとするドラマなどに惑わされる奴＝作者的存在ｗ）などを防止する上では役立つかもしれない。逆に、ゲームで出来たからと言って、出来る物ではない。ゲーム内ではある程度簡略化しているからである。

例えば、ログを消す作業だが、実際はツールを使わないと出来ない所もある。
ログファイルの場所が、／ｖａｒ／ｌｏｇ（ｕｂｕｎｔｕを作者は

使っていますが、ＬｉｖｅＨａｃｋｉｎｇと言う物ではここでした。）だからと言って、そこ以外にもログファイルがあると言うことを忘れてはいけない。Ｌｉｎｕｘ（ＯＳの１つ。ＵＮＩＸ系ＯＳと言われる、無料のＯＳ）のログは、多数ある。
標準で、ログインログ・動作ログ・コマンドログ・アクセスログとこれ以上にもバックアップも含めて、８個ぐらいあるのだが、それらを消さなくてはいけない。
中には、訳の分からない文字列を送信すると消えるログもあるのだが、全てがそうとは限らない。だからこそ、ゲームと現実を区別も出来なくてはいけないのである。

実はこのゲーム。逃げ道がある。
画面の右下の端に、赤や緑や青が付くのである。青の時にクリックすると、ハッキングが必ず成功すると言う裏技である。緑の時は、得点が－５０され、赤の時は必ず失敗すると言う物。
誰も気付いていないが、これをクリックすれば、どんなにハッキングが出来なくても、キーボードを勝手に叩けば、ゲーム内ではハッキング出来るのである。

「エラーか。どこにバグがあるんだ？」と言ってプログラミングをしている先輩達を見て、
「ちょっと休憩にこのゲームをしてみませんか？」と言ってみたら、「そんな暇無い」と怒られて、そしたら、後輩が興味を持ってしまったと言うのが、現時点でこの部活がやっていることである。顧問と言う存在が無いのに、先輩達は必死にプログラミングしている。
実を言うと、エラーが出たバグの内容が、セミコロン（；←これプログラムの行の最後に付ける。付け忘れたら、エラーになる。）である事を知っているのだが、まだ気付いていない先輩を見て楽しんでいるのである。
酷いと言われればそれまでだが、案外楽しい。

「先輩、２５行目にセミコロンを付け忘れてますよ。」と教えてみた。
「分かってる！」とか怒って、訂正し始めた。
やはり、気付かなかったらしい。エラーをちゃんと読めば分かる事である。
エラー文に、Ｅｒｒｏｒ：２５：'；'と書いてある。つまり、２５行目にセミコロンの付け忘れと言うエラーですよっと書いてあるのだが、何故読まなかったのだろう。

「先輩、分からなかった癖に。」と呟いてみた。
「分からなかったぐらい誰にだってあるだろ！」とさらに怒った。

「まぁ、それぐらいで。」と後輩に止められた。
それからは、普通にキーボードで遊んでから帰途についた。

Ｌｏｃａｌ☆ＳＴＡＲ

佐藤大介は、今日も学校へ向かう。
昨日、むしゃくしゃした心理状態でサーバに侵入した。
弱いサーバを見付けるのは簡単である。
ただ、事前にＬｏｃａｌ★ＳＴＡＲが侵入していたら、再び反撃されてしまう可能性もある。

いつか追い込むと決めても、国際的ハッカーに対抗出来る筈がない。
どこに住んでいるのかも分からないのに、どうやって対抗しようと言うのか。

学校に着いた。

佐藤は、高校の機械科の情報学担当の教員である。
情報学は、普通に言えば、パソコンを使った授業である。
コンピュータと言えば、サーバを含んだ大多数を指すが、パソコンと言えば、家庭で使う機械である。その中で、プログラムを作る事を授業でやっている。
プログラミングは、就職を第一とする機械科にとって重要であると佐藤は信じている。
なぜなら、情報化社会に於いて、プログラミングが出来ると言うのは、貴重な人材だからである。

ただ、佐藤にとっては、遊びにしかならない。

まさか学校の中に、Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲが居るとは思っても居ないだろう。
何日か前にすれ違った普通科の生徒が、Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲだと

考えもしなかっただろう。

それは、小林でも同じである。
まさか、学校教員がＣｌａｃであるとは思ってもみなかっただろう。

小林は、高橋弘樹のクラスの前にいた。
「おい、高橋。ちょっと来てくれ。」
と呼ぶと、なんか”なんでお前のために動かなくちゃいけないんだよ”的な目線でこっちをちらっと見てから、再び友達と喋りだした。
「高橋のパソコンのデスクトップにあるパスワード付き隠しフォルダの中身・・・」
すぐに高橋が飛んできて、小林の口を塞ぐ。
「先輩。それ、昨日作ったフォルダじゃないですか。なんで知ってるんですか。」
「昨日、見たから。」
高橋が、絶叫し始めた。
と思ったら、すぐに終わった。
「何のようですか？」
「弟子になれ。」
「はぁ？」
「いや、最近、ペンテストを教えるのに、ちょうど良い奴が居なくて。」
「それって、後継者が居ないって事ですか？」
「そんな所。で、弟子の第一号にちょうどいいかなぁって思ったから来たんだけれど。」
「うーん。」
高橋が考えている。
「嫌です。」
３秒で答えが出た。これを即答と言うのだろう。
けれど、すぐに答えをひっくり返した。

「や、やりますから。」
小林が手に掲げた携帯には、高橋のパソコンの中にあった画像の一枚が表示されていた。
しかも、高橋の携帯をいつの間に盗ったのか、その携帯は、高橋の物だった。

「じゃぁ、放課後、門の所にいろよ。」
「わ、分かりました。」
高橋は行く気なんてない。
っと、教室にあるスピーカーから音が流れた。
「す、好きです付き合ってください！・・・駄目だな・・・うーん・・・こんな感じかな・・・す、好きです。付き合って・・・駄目だな・・・。」
高橋が、パソコンに何故か録音していた音声である。
実は、放送員である小林は、ノートパソコンを放送室に仕掛け、携帯で再生できるようにしていたのである。

「先輩！何したんですか！」
「いや、ちょっと手が滑っただけ。」
高橋が、教室中の女子から変な目で見られていたのは言うまでもない。
実を言うと、高橋のクラスの次の授業である英語で使われるプロジェクターに映し出されるのは、高橋のパソコンのデスクトップにあった隠しフォルダの中身である。
ここまでやれば、流石に高橋も観念せざるを得ない。
「極度に虐めすぎたな。」
呟いてみたけれど、誰も聞いていなかった。

―放課後
「先輩。遅いです。」
「いや、普通だ。」
「で。どこで教えてくれるんですか。」
「まずは、パソコンの使い方を覚えろ。」
「え？パソコン室ですか？」
「あ、そういえば、パソコン部に入れ。今すぐ。」
「分かりました。」
歩き出した方向は、間違いなくパソコン室である。
「なんで部活やるんですか？」
「パソコンの基本的動作を知るためだ。」
パソコン室に着いたら、先輩が居た。
「新入部員か。」と先輩が言う。

数十分、部活の概要を説明した後、早速、ノルマを与える。
このノルマが達成できないと、帰る事は出来ない。
もちろん、小林は既に終わらせている。

「難しいです。」
小林の隣で呟く高橋。
「いや、簡単だろ。これぐらい出来ないと、もっと難しい内容が出来ない。」
「はぁ・・・。何年掛かるんですかね。」
「3年から5年ぐらいは掛かりそうだな。」
「そんな・・・。」
「全ては、お前しだいだ。進みが早ければ早いほど、時間を短縮してやる。」
高橋が、一生懸命にキーボードを叩き始めた。
「もちろん、タイピングミスが少なくならなきゃ駄目だが。」

と小林が呟いたのを高橋は聞いていなかった。

Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲ

次の日も、その次の日も、普通の部活を高橋にやらせた。
なんとか、タイピングミスが無くなるまで待とうと小林は考えて居た。

「うーん。どうしようか・・・。」
小林が自宅のパソコンの前で考え事をしている。
と言うのも、ｃｌａｃと戦い、勝てる勝算はある。
だが、勝算があっても負ける事もある。それが怖い。
負けた時こそ、国際的指名手配犯である小林は、捕まる事になるかもしれない。

その危険性を少しでも減らす為に、高橋を使おうと思ったが、なかなか上達しない。
このままだと、高橋の教育だけで終わってしまう。
イタリア軍が、協会に火薬を置いとけば、神のご加護で守られると信じて、協会に雷が落ち大火災になったように、何が起こるか分かったものではない。

ｃｌａｃも考えていた。
Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲと正面から対決して勝てる物ではない。
それならどうすべきか。
正攻法が無理なら、罠を仕掛けるべきである。
罠に気付かれず、相手が引っ掛かればあとは思う壷である。
ただ、相手が相手だけに、どんな罠を仕掛ければ良いのかが分からない。
不自然すぎるとバレるし、かと言って、自然にするのはかなり困難

である。
一番良いのは、Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲの弱点を握る事である。
勿論、相手が困るような弱点を握らなければ意味が無い。
だが、Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲは世界のどこに居るか誰も知らない。
そんな奴の弱点を簡単に握れる物ではない。
もし、日本の反対側であるブラジルに居るとなったら、どうやって弱点を握るべきなのか。

思考を巡らせた、ｃｌａｃはある仮定に辿り着いた。
チャットルームに居た人の中に、Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲが居たのでは無いだろうか。
自分が侵入する先がバレたと言うより、鉢合わせた可能性も考えて居たが、チャットに居たからこそ、宣言したサーバへの侵入がバレたのではないか。
もしそうならば、Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲは日本人と言うことになる。
あとは、その時のチャットサーバもＬｏｃａｌ★ＳＴＡＲが押さえていると言う事実がある。
多数の踏み台を使うであろうＬｏｃａｌ★ＳＴＡＲが、全ての侵入先サーバをカバー出来る訳では無いだろう。
主要サーバのみをカバーしているのであれば、残りは全てプログラムによる侵入検知の筈。
そうなれば、侵入する事はある程度簡単になる。
ｃｌａｃが不敵に笑ったその顔を見た人は居ない。
もし居たならば、見た人は、こう言っただろう。
「まるで悪魔みたいだ。」と。

Ｌｏｃａｌ☆ＳＴＡＲ

小林は、午後８時に帰宅した。
今日も、高橋への教育をして疲れて帰って来たのである。
部屋にあるパソコンの１台にアラートが出ている。

サーバへの侵入者あり。直ちに対処せよ。

ダイアログを消すと、次のダイアログが出てきた。これは、ある程度前に攻撃された事を示し、どこまで防衛出来たかが分かるようにである。

第一防衛ライン突破。直ちに対処せよ。

再びダイアログが出てくる。流石に、小林の顔も変わってきた。

第二防衛ライン突破。プログラムエラー発生。自動対処不可。

ここまで来て、相手のＯＳ情報やＩＰ、ｈｏｓｔを抜くプログラムが稼働したらしく、情報を載せたダイアログが出てきた。

その情報によって、侵入者が、ｃｌａｃであることを確認した、小林は、キーボードの前に座ると、チャットサーバとその他のサーバを繋ぐ踏み台用のルートを全て遮断していく。
流れるコマンドを飛ばし読みしながら、次のコマンドが頭に思い浮かぶ頃に条件反射の如く、キーボードを叩き続ける。

小林はルートを全て塞いだ上に、二重の防衛プログラムと三重の最上級防衛プログラムを動作させ、必要最低限のパソコンをネットか

ら遮断した。

ｃｌａｃはまたしても負けた。
折角、チャットサーバへは侵入したのにも関わらず、次のサーバへ侵入するのに手こずったのである。その間に、小林が全てのルートを塞いでしまった為、打つ手が無くなった。

小林は、チャットサーバを2度と使わないようにすると決め、踏み台として使えないサーバを入れている、ブラックリストにチャットサーバを追加し、踏み台として使うサーバのリストから削除した。

佐藤は考える。
ｃｌａｃとして対決するなら、罠に掛けるのも難しいなら、
同規模のハッカーになれば、正攻法で勝てるかも知れない。
同規模かそれ以上を目指し、相手を超えてから戦えば良い。

今のままで行けば、1年後には確実に戦える筈である。
相手を叩きのめせば、国際的指名手配犯を捕まえたと言う名誉が残る。
そうすれば、過去最高のハッカーとして崇められるではないか。
勿論、負けた時の代償は大きい。
世界的規模のハッカーと対決し負けた馬鹿野郎のレッテルをその他大多数の対決者と同じく貼られ、刑務所行きである。

対決は、自分に都合の良い条件が揃った時と佐藤は決めた。

小林は、空を見て、赤い月を眺めていた。

小林の踏み台サーバが攻撃を受けてから数ヶ月。
相手は諦めたのか、一切の攻撃が来なくなった。

そして、小林の隣に座る高橋は、ハッキングを覚えている段階である。
部活のタイピングミスは少なくなり、セキュリティを教えれば使えるかも知れない段階である。

小林が数ヶ月前に作った、ハッキングシミュレーションゲームを高橋がやっている。

「そこは違うんだって。ｎｍａｐに他のオプションを付ければ良いだろ。」
「だって、オプション分からないし。」
「あれほど、覚えろって言ったのに、まだ覚えてないのか。」

そう言った時、コンピュータ室のドアが開いた。
教師である。

高橋と佐藤が使っているパソコンの側を通り過ぎた。
その時に、チラリと盗み見た液晶に映っていたハッキングシミュレーションゲームを見て、
通り過ぎた教師は、瞠目した。

後ろにあった書類を手に取ると、すぐにその教師は部屋を出た。
小林と高橋は気付いていなかった。
彼こそが、ｃｌａｃこと、佐藤である事を。

佐藤は部屋を出てから思考を巡らせる。
あれは、まさしくハッキングではないか。
まさか、コマンド入力をしていた人物こそが、Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲだと言うことか？

もし、そうだとしたら弱みを握る事が出来るではないか。
機械科の生徒で無いことは確かである。
情報で機械科の生徒を教えるのだから、機械科なら誰なのか分かる。
と言うことは、普通科の生徒である。
学年は分からないが、そんな些細な事など佐藤にとってもはやどうでも良かった。

Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲを遂に見つけたと言う自己陶酔しか無かったのである。

しかしながら、佐藤は気付いていなかった。高橋がやっていたのがゲームであると言うことを。佐藤は、本当にハッキングしているのだと思っていた。

さらに、小林がＬｏｃａｌ★ＳＴＡＲで、高橋がその弟子と言うことを知らず、高橋こそが、Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲだと思い込んでしまった。

この勘違いが、佐藤にとってどうなるのか。
小林や高橋にとって、どうなるのかなど分かる人は誰も居なかっただろう。

「高橋、今日はもう良いぞ。」
「え、今日はやけに早いですね。」

放課後のコンピュータ室に居る、２人である。
まだ、放課後を知らせるチャイムが鳴ってから、１時間程度しか経っていない。
いつもなら、２時間程度は部活に専念させられる筈なのだが、今日は帰って良いと言う。

「なにかあるんですか？」と高橋が言う。
「ちょっとプログラムを作らなきゃいけないからな。」
小林は、数ヶ月も前のサーバへの侵入に対する管理プログラムの強化版を作ろうとしていた。

「そうですか。」
やっと、要領が掴めてきていた高橋にとって、虚しい気持ちがあった。

その頃、佐藤は、冷静に考えていた。
この学校の生徒が、ハッキングをしていたからと言って、Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲとは限らないではないか。ある程度のコンピュータに対する知識があれば、ハッキングに興味を持つのは、当然とも言える。佐藤も、学生の頃にハッキングに興味を持ったのである。

今一度、確認しておかなければ、自分にとって脅威となり得る存在かも知れない。
もし、上手く交渉が進めば、味方にしても良い。

Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲは、一筋縄ではいかない相手。
正攻法が敵わないなら、挟み撃ちも戦法の１つではないだろうか。

小林は、家に帰ると早速、プログラムの作成に掛かる。
攻撃者のＩＰとＨＯＳＴ、ＯＳ情報をログとして保持しながら、攻撃者に反撃するファイルを送信する。送信されたウイルスによって、攻撃者のネット接続を遮断すると言う物である。
勿論、送信されたウイルスが起動すれば、ネット接続からの遮断以外にも、フォーマットが自動実行されると言う物である。

数時間かけて作成したプログラムのバグを修正しながら、その日は終わった。

佐藤は、家でプログラムを作成していた。
これは、自分が侵入したサーバに対しての侵入検知である。
他にも、侵入したサーバから別のサーバへと自動で攻撃してバックドアの設置までの自動化もしてある。勿論、１度侵入したサーバかどうかの確認があり、侵入していた場合は、スルーされると言う物である。
明日は、ハッキングをしていた学生と交渉しようと決断し、その日は終わった。

高橋は、家で与えられたハッキング用の資料を読んでいた。
ポートスキャンから、ハニーポットまでの章を続けて読むと流石に疲れたのか、そのまま寝てしまった。
高橋の１人部屋に、小さな寝言が流れた。
「ウォードライビング？」

誰かに尋ねたかのような高橋の寝言は、既にハッカーになろうとする少年の記憶している事、その物だったと言っても過言ではない。

3人がそれぞれの目的を達した時、一体何が起こるのだろう。

佐藤は、交渉しようと考えていた。
まず、基本的な質問を行い、答えられたら事の顛末を話し、協力して貰う。
佐藤にとっては、これが一番良い方法だと思えたのである。

放課後になり、小林と高橋は、再びハッキングゲームを行う。
そこに、佐藤が来た。交渉の為である。

「あ、君。ちょっと話があるんだけど良いかな。」
「分かりました。先輩もですか？」
「どっちでも良いよ。」
佐藤にとって興味があるのは、高橋だけである。
どうせ、それ以外のセキュリティに興味があるか無いか分からない奴が聞いても分からないだろうと考えて居た。
「じゃぁ、一緒に。」
小林も結局来る事になった。

パソコン室から少し離れた所にある、小さな部屋。
放課後に使う人は誰も居ない。

「あの、先生。何のようでしょうか？」
「あ、自己紹介がまだだったね、佐藤大介です。機械科で情報学をやってる。」
「で、その機械科の先生が、普通科の俺と高橋に何のようでしょうか？」
小林が、答えた。

「いや、ちょっとパソコンに詳しそうだったから訊きたい事があって。」
「何でしょうか？」
「ＣＳＲＦって知ってる？」
ＣＳＲＦと聞いた途端、小林の態度が変わる。が、教師は高橋に訊いている為、答えない。
勿論、高橋も資料をちゃんと読んでいれば知っている筈の単語である。
「ＣＳＲＦ？何ですかそれ。」
小林は後で高橋を殴ることを決意した。
「先生、こいつはパソコンが出来ないのでセキュリティ系を訊いても分からないですよ。」
小林が内心の高橋への怒りを抑えつつ、教師に答える。
佐藤は、小林がセキュリティ系と言った途端、態度が変わった。
佐藤は、一言もＣＳＲＦがセキュリティ関連だとは言っていない。
「君の方が詳しいのか。じゃぁ、君に訊こう。ＣＳＲＦとは何か知ってるかい？」
勿論、小林は知っている。
「ＣＳＲＦは、クロスサイトリクエストフォージリと呼ばれるＷＷＷに於ける攻撃方法の１つです。ユーザ側が意図しないコメントを書き込ませたり、ルータの設定を変更することも可能です。」
「詳しいね。じゃぁ、君に訊くが、ハッキングって知ってるかい？」
小林は、即答する。
「意味は知ってますが、やり方は知りません。」
「そうか。訊きたい事は訊いたから、戻って良いよ。」
失礼しますと言い、小林と高橋が帰る。
佐藤は、当てが外れた事を悔やんだ。

「高橋。」
「何ですか。先輩。怖いですよ。」
「貴様、資料を読んでないのか。」
「よ、読んでますよ。」
「じゃぁ、ＣＳＲＦぐらい知ってるだろ。」
「知ってますよ。ユーザに意図させないコメントをさせたり、」
「させたり？続きは。」
「えっと、コメントさせる事です！」
「駄目だ。資料をちゃんと読め。じゃないとタイピングからやり直しだ。」
「えぇー。そんなぁ。酷いですよ。」

と言う、会話が行われている頃、佐藤大介は小林の素性を洗っていた。
そう、詳しいと思っていなかった方が、セキュリティに詳しかった上に、ＣＳＲＦの説明が出来ると言うことは、ハッカーかと思って続けて質問するとハッキングは知らないと言われた為、セキュリティ系の資格取得者である可能性を考慮したのである。
もし、そうであるなら、弟子にすれば心強い。

もちろん、両者とも対立する相手だとは思っても居なかった。

Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲ（後書き）

作中に出てきたＣＳＲＦですが、ｍｉｘｉでぼくはまちちゃん事件として有名になった物です。

今回、ＣＳＲＦをモバイルスペースに仕掛けました。（モバスペの自分のアカウントなので、違法では無いです。）
ｈｔｔｐ：／／ｋｙｕｓａｎ．ｙｏｋｏｃｈｏｕ．ｃｏｍ／ＣＳＲＦ／ｃ．ｈｔｍ
セキュリティに興味がある方は、ＣＳＲＦを体験してみてください。
※犯罪性はありません。勝手に意図しないコメントが書き込まれるだけです。悪用すれば、犯罪になります。

悪魔の激励

「今回の成果は、まだ良いとは言えないが、サーバの管理をしてみろ。」
と、放課後、小林に言われて高橋は、サーバを一台管理する事となった。

もちろん、小林が見守ってるような状況だが、高橋が一人で管理するのと変わらないだろう。

高橋が、プログラムを組んでいると、小林がサーバに残しておいたセキュリティプログラムが起動した。

「なになに・・・？ダイアログが出るんだ。えっと、Ｅｒｒｏｒ，Ｓｙｓｔｅｍ．ｒｏｏｔ．Ｌｏｇｉｎ：：Ａｒｅａｒｔ？ログインなんてしてないよね。もしかして、サイバー攻撃受けてるのかな？」
と独り言を高橋が呟いている間に、ダイアログが再び出てくる。
Ｅｒｒｏｒ，ＮｅｔｗｏｒｋＳｙｓｔｅｍ．．ＮＭＡＰ．Ａｒｅａｒｔ
「え？ポートスキャンされてる・・・。えっと、どうしよう・・・。」
慌てる高橋。ポートスキャンとは、侵入用の入り口を探す行為で、攻撃するサーバに対して行われる事が多い。
「あ、サーバの電源を落とせば・・・落としても、起動したら攻撃が再開されるかもしれない・・・。反撃しかない。」
高橋は、再び独り言を呟き、キーボードを叩く。
「Ｅｒｒｏｒ：：Ｓｙｓｔｅｍ：ＰＯＲＴ１９９／ＴＣＰ　ｏｐｅｎ．．」
高橋は、さっき叩いたコマンドを消して、新たにコマンドを入れる。

「ＡＬＬ，ＰＯＲＴ　ｃｌｏｓｅ．．．．ＯＫ！」
ダイアログが出てきた途端、高橋が溜息をついた。
全ての出入り口を閉ざしたサーバは、強行突破されない限りは、攻撃を防ぐ事が出来る。
もちろん、全ての出入り口を閉ざした為、インターネット接続も遮断される。

その時、小林から携帯に電話が来る。
「先輩、攻撃を防ぎました。」
「待て、攻撃を防いだって何をした？」
「ポートを全て閉じました。これで良いですか？」
「有線接続を物理的に遮断しろ。」
「え？」

有線接続の物理的遮断と言うことは、インターネットに接続する為の、ルータの配線を外せと言う事。つまり、ポート以外で完全にネットから遮断する方法である。

「分かりました。外しました。」
「パスワードとＩＤを変更しろ。ログイン名も。」
「はい。」
「ブートローダ（起動させるやつ）にパスワードをつけて、再起動。」
「はい。」
小林の指示通りに、高橋が行動する。

その頃、佐藤は、あるサーバに攻撃した。
勿論、踏み台にする為である。

所が、ポートを全て遮断されて手段がなくなったのである。

折角のチャンスだった。

しかし、今考えると、Ｌｏｃａｌ☆ＳＴＡＲの罠だったかもしれない。

佐藤は、身震いした。

恐怖からではなく、今後自分がどのように対決し、勝てるかをシミュレートした上で、

小林と言う少年と手を組めば、自分が勝てる可能性がある事を信じて。

悪魔の奨励

小林や高橋、佐藤が激戦を繰り広げている頃、東京から遠く離れた九州の北部、福岡県でネットサーフィン中の学生が居た。

彼は、国際的ハッカーでは無い。しかし、ハッカーではある。事実、彼が無線ＬＡＮで接続している場所は、他人のルータを介している。

そして、ネット上で活動を展開するハッキング集団、ＳｅｃｕｒｔｙＡｔｔａｃｋのメンバーであり、佐藤のチャット仲間である。

佐藤からこれまでの経過を教えられている彼は、腕試しがしたくなっていた。

チャットでの会話で、国際的ハッカーと勝負していると佐藤が教えたのは、数日前である。

しかし、佐藤が国際的ハッカーを一方的に攻撃していると言うのが、彼に引っ掛かっていたようである。と言うのも、佐藤の知識だと国際的ハッカーに対して、一方的な攻撃が出来る訳が無いと思っているからである。

勿論、佐藤は一般人より知識が豊富なのだが、業界では普通である。彼は、佐藤が攻撃しているのが、国際的ハッカーだとは考えられないと思っている。

そして、今日。佐藤が攻撃している国際的ハッカーの腕を調べたいと思ったのである。

早速、パソコンの前に座り、起動しているＬｉｎｕｘのコンソールを立ち上げる。

相手のＩＰやホストは、佐藤から聞いている上に、ＦＢＩのホームページで公開されている為、間違いでは無い筈である。

一般的に使われているポートに対してスキャンをしてみると、２２番が開いている。
２２番ポートは、ＳＳＨで使われる為、ＩＤとパスワードをｍｅｄｕｓａと言うパスワードクラックツールで、解析する。
しかし、解析結果は、ＩＤ：ｒｏｏｔ　ＰＡＳＳ：ｒｏｏｔである。
ｒｏｏｔは管理者の意味で、ＩＤもパスワードもｒｏｏｔであると言う事は、相当なセキュリティ初心者だと考えられる。
もしかしたら、セキュリティなんて知らないかもしれない。

このような相手に、手間取っている佐藤のレベルは、やはり低かったと言う事だろうか。

そのような思考を巡らせている最中に、画面が真っ暗になる。
そして、真ん中にダイアログが立ち上がった。

タイトルは、何も書かれていないが、日本語で本文が書かれている。
「あなたは、国際的ハッカーである、Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲのサーバに”日本”から攻撃しました。
よって、ここに到達出来た事を喜んで下さい。当サーバは、データ抜き取り用です。」

Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲの噂は、知っている。
国際的ハッカーで、身元不明。ＦＢＩなどの国際組織に追われている人間である。
しかし、佐藤は、日本人ではないかと思っているらしい。

「佐藤と共同戦線を組んでみるか。あいつも教育ついでに、使ってみるか。」
彼が呟いた暗い部屋の中で、ディスプレイの明かりを受けているその顔は、まさしく悪魔と呼ぶのにふさわしく、彼が手にした電話に映る相手の名前が、これからの展開を面白くさせる事を予期させた。
その名は、「高橋弘樹」

悪魔の奨励

東京在住の高橋は、溜息を吐く。
小林から教えられたハッキング集団に、仲間入りしたのは良いが、その中のＷｏｒｋＳを名乗る人から、電話が来たのである。

内容は簡単。
「国際的ハッカーＬｏｃａｌ★ＳＴＡＲの腕試しをやろうと思うが、参加しないか？」と言うもの。
その国際的ハッカーＬｏｃａｌ★ＳＴＡＲにも、同じ内容で電話が来ているのだが、「参加する」と言う小林と、その小林こそが国際的ハッカーＬｏｃａｌ★ＳＴＡＲである事を知っている高橋は、悩んでいるのである。

「先輩。何で自分相手に攻撃するのに参加するんですか。」
高橋の問いかけに、小林は淡々と答える。
「何故？俺が俺を攻撃するんだ。楽しそうじゃないか。勿論、ＷｏｒｋＳが俺の正体を知っている訳でもない。ＷｏｒｋＳの正体は既に知っているけどね。もっとも、彼がどのように攻撃したって、俺のシステムに侵入出来る訳がない。どんな攻撃を受けたって、例え俺がキーボードに触れなくても、防御が出来るから国際的ハッカーと言われるのだから。」

高橋はどうしようかとまだ悩んでいる。
「高橋。」
数分黙っていた小林が呼びかける。ここは暗い路地である。路地と言っても、別れ道でもある。小林と高橋は、この別れ道で別れなければ、家に着かない。
「お前も参加しろよ。どれだけ成長したか知りたいだろう。実践も

必要だ。」
高橋は小林に、最後の質問をしようと思った。
「もし、先輩が負けたら。この呼びかけに応じた人のハッキングが成功して、システムに侵入されたらどうなるんですか？」
成功する確率は低い。限りなく低い。しかし、小林が想定しない事態が起こせれば、彼のシステムに侵入することは可能なのである。もし、侵入され捕まる恐怖があるならば、参加する事を思い留まるのではないかと高橋は考えた。

「もし、俺のシステムが侵入された時は、覚悟は決めるさ。けれど、俺のシステムに想定外が在ってはいけないんだよ。例えそれが侵入される事であっても、特定される事であっても。限りなくゼロに等しい可能性が必要なんじゃない。限りなくゼロでなくてはならないんだ。それを確かめる為にも、参加する方が良いんだよ。」

高橋は覚悟を決めた。
例え、小林が国際的ハッカーの地位を堕とされても、それが刑務所に行くことであっても、彼が彼である為に必要な内容の１つなのである。
彼が、国際的ハッカーでなければ、高橋はセキュリティに足を踏み入れる事は無かった。
どんなに彼に、捕まって欲しくなくても、小林に対して手を抜くことは屈辱なのだ。
小林に対して、全力で闘う事が今の高橋が出来る事なのである。

「分かりました。どんなに先輩が危険でも、俺は先輩を打ち破ってみせる。」
高橋が言うのを、小林は背中で聞いていた。

悪魔の奨励

「やぁ。今からパーティの始まりだ。参加者を発表してから、各自リモートデスクトップを準備、俺に見えるように設定してくれ。」

数ヶ月後、国際的ハッカーであるＬｏｃａｌ★ＳＴＡＲを倒す事を目的としたパーティの開催が、宣言された。

主催者は、ＷｏｒｋＳこと福岡県在住の学生である。

ＷｏｒｋＳだけは、参加者のモニターが全て表示されるようになっている。

これで、遠距離の仲間の行動を把握できる訳である。

ＷｏｒｋＳ以外は、見る事が出来ないので、マイクを使い指示を出し合う。

最終的に、Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲをＦＢＩなどに通報する為のデータを手に入れることが出来れば、終わりである。

参加者は、以下。（ＷｏｒｋＳが把握している範囲のみ）

ＷｏｒｋＳ　福岡　齋藤亮助（さいとうりょうすけ）
Ｃｌａｃ　東京　佐藤大介（さとうだいすけ）
ＥａｓｙＴ　東京　高橋弘樹（たかはしこうき）
Ｒｏｏｔ．Ｋ　東京　小林誠二（こばやしせいじ）（小林誠の偽名）
Ｋｉｌｌ@Ｓ　札幌　田中信二（たなかしんじ）
Ｌ（ｏｏ；））　愛知　久保俊之（くぼとしゆき）
@ｄｏｍｉｎ　埼玉　佐藤雅俊（さとうまさとし）
Ｐｏｔｅｒ．　不明　不明

「さぁ、準備は整った。パーティの開始だ。攻撃は担当を分けて行う。

ｎｍａｐ担当は、ＣｌａｃとＥａｓｙＴ　まずは、ポートを調べて

くれ。」
齋藤の指示を受け、佐藤と高橋は、ポートスキャンを行う。
「Ｃｌａｃより、パーティ。開いているポートは、ＴＣＰ８０，２２，４４３，１１０，６０００以上。」
佐藤から、全員に報告が入る。これによって、ＴＣＰポートで攻撃出来る場所が定まった。
「ＥａｓｙＴが続けて報告。使用ＯＳは、ＦｒｅｅＢＳＤかと憶測可能。ｔｅｌｎｅｔの結果でＳＳＨを使用している模様。」
続けて、高橋がｎｍａｐ －Ｏと言うコマンドを使い、ＯＳ情報を特定。ｔｅｌｎｅｔでサービスの検索を掛けた結果、ＳＳＨを使用している事が判明した。これにより、ＴＣＰ／２２（ｓｓｈ用ポート）が使用可能であると判断可能である。勿論、全ての作業が、齋藤に見えている。
しかし、小林だけがターミナルを開いて何もしてないように見える。

「おい、Ｒｏｏｔ．Ｋ行動しろ。」
齋藤が呼びかける。
「あぁ、すまない。ちょっと待ってくれ。」
小林のターミナルが消え、新たなターミナルが起動する。
そして、小林が与えられたユーザ名の検索を開始する。

この時、齋藤は何も感じなかった。小林が何もしていないように見えただけである。
しかし、実際は違う。
小林は、コマンドを入力していたのだ。
Ｌｉｎｕｘのコンソールは、ｃｔｒｌ＋ｓと言うコマンドで画面出力をしないようにする事が出来るのである。解除は、ｃｔｒｌ＋ｑだが、解除した途端に実行したコマンドが一瞬で流れる。
齋藤は、何が起きたか全く分からないと言う訳である。

小林は、見えていない文字列を頭の中で想定しながら、コマンドを入力していた。
例えば、攻撃しているサーバのポートを開放し、そのサーバへ侵入を試みるパーティメンバーの情報を抜き取る為にログを設定したりと、本当は行動していたのである。

ユーザ名が把握できたのは、それから数十分後であった。
この速さで特定出来たのは、高橋を除くパーティメンバーが一般の人より高い技術を持っていたからに過ぎない。
あとは、パスワードを把握すれば、ＳＳＨで接続が可能である。
「ｐｏｔｅｒ．応答しろ。」
久保が呼びかけた。齋藤と久保は、このパーティのリーダとサブリーダの役割である。
「こちら、ｐｏｔｅｒ．」
ｐｏｔｅｒは、齋藤が唯一把握していない（小林の事も把握できていないのだが。）人物である。小林とｐｏｔｅｒは、声にフィルターを使っている為、さらに分からない。

「ｐｏｔｅｒ．はｍｅｄｕｓａ（パスワードクラックツール）を起動し、辞書攻撃（リスト攻撃）を。ｋｉｌｌ@Ｓは、同じくｍｅｄｕｓａで、総当たり攻撃（ブルートフォース攻撃）を。@ｄｏｍｅｉｎは、ｈｙｄｒａ（ｍｅｄｕｓａと同じくパスワードクラックツール）を起動し、辞書攻撃を。」

ｍｅｄｕｓａとｈｙｄｒａに関しては、パスワードクラックツールとして有名な物である。
しかし、パスワードクラックには時間が掛かる※1
その為、分散して行うのである。

彼らは、パスワードを見付ける事が出来なかった。

何故なら、彼らがパスワードクラックを実行すると、強制的に停止されてしまうのである。
勿論、自分で停止処理を指定している訳では無い。あくまで遠隔操作されているかのような感じである。

それは、国際的ハッカーであるＬｏｃａｌ★ＳＴＡＲからの反撃が始まった事を示していた。

悪魔の奨励（後書き）

※1
ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｙｏｕｔｕｂｅ．ｃｏｍ／ｗａｔｃｈ？ｖ＝ｎ１９ｗｅｈｈ－Ｐｘ０
作者が、実際に箱庭環境を用いてハッキングを行った際に、ｍｅｄｕｓａを使用しています。御覧下さい。

悪魔の激励

「こ、これは何だ・・・？」
斎藤が声を発する。
他の人は、何が起きたか分からない。
斎藤のみが見る事が可能な、参加者のモニターを全て表示する筈の斎藤のディスプレイが、何も表示しなくなったのである。コントロールすら出来ない。

何も見えず、操作不可能。これでは何も出来ない。

「ＷｏｒｋＳ、応答せよ」
久保が声を掛ける。
「全員、パソコンの操作は可能か？」
斎藤が声を発する。
何とかマイクは使えるようである。

「いや、無理だ。」
久保が答える。
この時、操作可能ＰＣは、佐藤大介、高橋弘樹、小林誠、田中信二、Ｐｏｔｅｒ．だけである。
しかし、佐藤と田中に関しては、マイクすら遮断された。

「こちら、Ｐｏｔｅｒ．全員応答せよ」
今まで喋らなかった謎の人物、Ｐｏｔｅｒ．が声を掛けた。
「どうした？これでは作戦実行は無理だが？」
斎藤が呼びかけに応じ、作戦実行中止を告げる。
「いや、作戦は続行すべきだ。」
Ｐｏｔｅｒ．が作戦続行をするべきだと言う。

「何故だ？」
斎藤が尋ねる。
「犯人は、この中に居るからだ。」
Ｐｏｔｅｒ．が事実を告げる。

この間、５秒にも満たない。

「何故分かる？」
久保が尋ねた。
「パケットのキャプチャをして攻撃元を割り出した。」
Ｐｏｔｅｒ．が犯人を告げようとしている。

この時、高橋は、もしも小林が犯人だとバレたら即座に、Ｐｏｔｅｒ．のパソコンに攻撃を仕掛けようと考えていた。高橋と小林の師弟関係は、最後に高橋が小林を攻撃出来なければ、ハッピーエンドとはならないと考えていたからである。

「犯人は・・・」
Ｐｏｔｅｒ．の声が途切れた。
「・・・田中だ。」
Ｐｏｔｅｒ．の声が戻った。

「本当か？」
斎藤がＰｏｔｅｒ．に呼びかけるが、応答は無い。

「俺じゃない！Ｐｏｔｅｒの勘違いだ！」
田中が抗議する。

「勘違いかどうかは、ＦＢＩが判断する事だ。」
小林が淡々と告げる。

「そんな・・・俺は何もしてないじゃないか！久保、お前なら分かるだろう。俺が犯人じゃ無いって。証明してくれよ！」
田中が嘆願する。
「いや、俺じゃ証明は出来ないな。」
田中の嘆願は、久保の一言で撃沈した。

「俺が地獄送りにしてやる。」
そう言って、小林がＦＢＩに田中がＬｏｖａｌ★ＳＴＡＲだと言う情報を送りつけた。

それから、数日後。
「先輩。どうやって、田中を犯人に仕立て上げたんですか？」
高橋が尋ねる。
高橋の勘が正しければ、Ｐｏｔｅｒ．も捕まっている筈だ。

「簡単だろ。どうせお前なら、もう分かってるんだろう？」
小林が、高橋の勘が当たっている事を告げる。
「やはり、Ｐｏｔｅｒ．の音声をサンプリングしてＰｏｔｅｒ側のマイクを切り、サンプリングした音声を流したんですね。」
「分かってるじゃないか。」

あの日、小林は、Ｐｏｔｅｒ．の音声をサンプリングし、「田中だ」と言う音声を作った。
そして、サーバ側に仕掛けてあったプログラムにより、数人はマイク切断。残りは、黒い画面と操作不能、そして操作可能と言う分類分けをしたのである。

あとは、誰にも見られない画面なので、Ｐｏｔｅｒを攻撃し、途中でマイク切断。作った音声を流すと言う物である。

多数でマイク通話をしていると、誰の発言かが分かりにくいと言う欠点を突いたのである。
これにより、田中はＬｏｃａｌ★ＳＴＡＲとして、Ｐｏｔｅｒ．はその補助役としてＦＢＩに逮捕されたのである。

「先輩。でも、Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲは、罪を認めていないようですよ。」
近くに人が来たので、あたかもニュースを見たかのような感じで話す高橋。

実は、この件は既に有名な出来事である。

各国のメディアやマスコミは、「世界的ハッカー、Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲ逮捕！」と大見出しで報じたのである。

だから、近くを通った機械科教師、佐藤大介は不信感を抱かなかった。
この高橋と小林が、セキュリティに精通しているのは知っているし、高橋に関してはパーティを組んだ中に居たと知ったからである。
小林は、ニュースでこの件を知ったんだろうと思っていた。

「そういえば、その犯人を捕まえたハッカーってのが、Ｃｌａｃって言うらしいよ。」
「へぇーそうなんですか。」
高橋と小林は、近くを通ったＣｌａｃに聞こえるように、話した。

「小林君。君は何を知っているのだ？」
振り向いて佐藤は、小林に問い掛けた。
しかし、小林も高橋も口を開かない。それどころか、自分の後ろを凝視しているようにも見える。

佐藤の肩に、手が置かれた。
「君、佐藤大介だね。この学校の機械科教師であり、Ｃｌａｃと言うハンドルネームを使うハッカー。君が侵入したチャットサーバからの被害届で、君を、不正アクセス禁止法違反の容疑で逮捕する。」
振り向くと、目の前で私服刑事が、逮捕状を広げていた。
佐藤の手に手錠が掛けられた。
「君たちは、この学校の生徒のようだが、佐藤大介に用はあるかね？」
刑事が、小林と高橋に尋ねる。
「刑事さん。最後に先生と話しても良いですか？」
小林が、刑事に問う。
「どうぞ。」
刑事が許可する。
佐藤が振り向いた時、小林が軽く口を動かした。
「先生、Ｌｏｃａｌ★ＳＴＡＲに見送られる気持ちは如何ですか？」
佐藤は何も言わなかった。
いや、言えなかった。
まさか、こんな近くに自分の敵が居たなんて思いもしなかった事である。
佐藤は、パトカーに乗せられた瞬間に喚いた。
「あいつが、国際的ハッカーだ！あいつこそが、真の犯罪者だ！」
と。
しかし、警察はまさか少年が犯罪者だと思う事も無く、佐藤の喚き

をスルーした。

こうして、ＣｌａｃとＬｏｃａｌ★ＳＴＡＲの戦いは終わりを告げたのである。

そして、Ｃｌａｃは世界的知名度が上がらないまま、暗い鉄格子の中に消えて行ったのである。

悪魔の激励（後書き）

物語はまだ続きますよ。
むしろ、ここから本編では無いかと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8017p/

痕跡

2011年10月13日21時54分発行